

名前をだしたらきりがないので、あえてだしません、国の内外を問わず、多くの作家がおぼけを書いています。

たくさん書いている作家もあれば、すこしだけ書いている作家もいます。

それでは、たくさん書いている作家が、おぼけを信じていて、すこしだけ書いている作家は、おぼけをすこしだけ信じているのでしょうか。

そうして、まったく書いていない作家は、おぼけをまったく信じていないのでしょうか。

あんがい、そうとはいきれないのは、ほんらい作家は「うそつき」だからです。

たくさんおぼけを書いている作家が、おぼけをまったく信じていないで、まったくおぼけを書いていない作家が、じつはおぼけを信じているということがあるかもしれません。

なぜなら、おぼけを信じているならこわくて書けないし、おぼけを信じていないならこわくないから、いくらでも書けるということがあるかもしれませんから。

それと、おぼけを作品の中の重要な象徴（しょうちょう）や比喩（ひゆ）として書いていて、ほんもののおぼけとして書いていないという場合もあります。

もっとも、おぼけにほんものとかにせものとかがあるかどうか、ほんものではないからおぼけであって、とはいえにせものだったら、おぼけではなくて影とか柳とか狐だったりするのでは。

あれこれかんがえはじめると、ややこしくてたまりませんから、ようするに信じるか信じないか、信じた者が勝ちということにしようとおもわれます。

さてぼくはおぼけを信じているかとなると、正直まったく信じてはいません。

ぼくの負け。

(ただし、おぼけの規定（きてい）とやらを、幽霊や変化や妖怪などと決めるか、「奇怪におもわれるもの」「恐ろしくかんじられるもの」「巨大

にみえるもの」などと捉えるかで、答えがいささか変わってくる気もしますが)

それではどうして、こんな話をいつまでも書いているのかとなると、「いまここ」ではおぼけはまったく信じていないのだけれども、おぼけを信じている（こども時代のぼくの分身である、というよりも、こども時代のぼくそのものである）金ちゃんや（ぼくのこども時代の英雄の）懐爺のことを信じているからです。

金ちゃんと懐爺の勝ち。

そうしてぼくにとって、金ちゃんや懐爺の存在こそ「いまここ」なのですから。

なんていっているぼくだって、「うそつき」である作家の末端の者なのです。

ますますややこしくなってきたので、このへんで。

## + 4 1 【つちざめ】

大山に小屋を建てて仕事をしている樵（きこり）の大上（おおかみ）さんが、大山から駆け降りてきました。

歩けば三時間かかるところを、三十分で走ってきたのです。

「大変じゃあ。大山に鱶（わに）がでたあ。鱶に喰われそうになったぞお」

汗と涙で濡れた顔を真っ赤にして叫んでいました。

村びとたちは苦笑しています。

「困ったもんじゃ。また大上さん恒例（こうれい）の法螺（ほら）が始まったぞ」

「大山に鱶なんかおるか。朽ち木を鱶とまちがえるなんざ、大上さんも毫碌（もうろく）したもんじゃ」

「去年は大山に海坊主がでたと、おおさわぎじゃったな。大上さんのさわぎは豚のえさにもならん」

こうなったら懐爺にきくしかありません。

「大上さんは法螺なんか言ってませんよ。それは【つちざめ】ですね」  
懐翁はいつもよりさらに歯切れがいい。

「やまにも、さめがいるんか」

そんな突拍子（とっぴょうし）もない話は信じられない。

「土の鮫で、【つちざめ】。枯れ葉や朽ち木が長年堆積して産まれたおぼけで、たしかに鰐に似ていますね。ふだんは土の中にいるんですが、おそらく大上さんが大山の木を伐りすぎたので、怒ってでてきたのでしょ

う」

納得。

「どうやって、たいじするんかのう」  
「大上さんも生活がかかっていますから、木を伐るなどいってもねえ」  
「ならば、むずかしいかのう」

「ひとつだけ方法があります。大昔、源頼光（みなもとのらいこう）という豪傑が【つちぐも】を退治しました。その太刀は〈蜘蛛切〉（くもぎり）と呼ばれています。【つちざめ】を退治するには〈鮫切〉（さめぎり）という太刀が必要です」

ふつうのひとなら信じられない話ですが、ぼくは信じるのです。

「そのたちは、どこにあるんかのう」

「ありません。ありませんが、どんな太刀でも大丈夫です。【つちざめ】にであったら、この太刀は〈鮫切〉だと叫べば、すごすごと土の中に退散するでしょう」

おぼけにごまかしが通用するのかと心配でしたが、

「そうかい。それでそのやくめは、だれがやるんじゃ」

「だれでもできるというわけではありません。源頼光に匹敵するつわものとしては、鬼若丸（おにわかまる）が最適ですかね」

「おにわかまるたあ、だれじゃ。どこにいるんじゃ」

「歌川国芳（うたがわくによし）描くところの鬼若丸に、なんと金ちゃん、そっくりなのですよ」

「なんじゃと。もしや、わしがおにわかまるにばけるんか。うしわかまるでなけりゃ、いやじゃ」

駄々をこねたが懐翁に諭され、神社でひとふりの太刀を借りると、大

上さんと一緒に大山にむかいました。

「金ちゃん、すまんなあ」

大上さんはしきりに恐縮（きょうしゆく）していました。

「いまわしは、きんちゃんでのうて、おにわかまるじゃ」

「すまんなあ、牛若丸でのうて」

「そらあもういいで。かいじいに、なんどもあやまれたでのう」

「鬼若丸どのに、ほんとにあの恐ろしい鱧がやっつけられるかなあ」

大上さんが半信半疑（はんしんはんぎ）なのはむりもありません。

ぼくだって半信半疑なのですから。

「ほんまに、わにかい」

「でっかい鱧にしかみえんかったがなあ。ただの鱧のかぶりものだったらええがなあ」

とにかく大山は遠い。

重い太刀を担（かつ）いでいるから、なおさら遠い。

「すまんなあ、おんぶするかなあ、鬼若丸どの」

「おんぶされるおにわかまるは、おにわかまるじゃのうて、へなちょこまるじゃ」

強がりをいってずんずん進むと、大上さんが【つちざめ】を見たという地点に、ようやく辿（たど）りつきました。

「おうい、【つちざめ】でてこいや」

すると突如（とつじょ）ぼくの叫び声が終わらぬうちに、土のなかから、なにものかが猛然（もうぜん）と姿を現しました。

土が天高く舞い上がり、ぼくらの上に霰（あられ）となって降ってきました。

腰をぬかしそうになるのをこらえて、降り注ぐ土を弾（はじ）きとばしながら、ぼくは目をこらしました。

これが懐爺（わいぢ）いうところの【つちざめ】か。

大上さんのいったとおり、たしかに鱧に似ている。

しかもこれだけでっかければ、鱧皮の財布が、すくなくとも五千個はできる。

ぼくは再び叫びます。

「わしは、おにわかまる。このたちは、さめぎりじゃぞ」

いうがはやいか、ぼくは、太刀を抜きはなつて、【つちざめ】の獯猛（どうもう） そうな牙の前につきだしました。

すると唐突（とうとつ）に、【つちざめ】は土の中にもぐってしまいました。

しばらく様子をうかがっていましたが、もうでてくる気配（けはい）はありません。

「あっけないのう。これでいいんかのう」

ぼくはふりかえつて、大上さんの顔を見ました。

大上さんは蒼ざめていましたが、

「あんがとさん、金ちゃん、いえ鬼若丸どの」

「ほこらのじいが、いっつたが、おおやまのきをば、きりすぎんようにのう」

ぼくがいうと大上さんは黙つてうなずきました。生活がかかっているのどうなりますことやら。

また【つちざめ】がでてきたら、牛若丸ではなくて、鬼若丸にばけるのかとかんがえると、じっさい憂鬱（ゆううつ）でした。

後年、歌川国芳（うたがわくによし）描くところの鬼若丸とやらを鑑賞しましたが、こどものころのぼくにそっくりなんてことはありませんでした。

すくなくとも当時のぼくは、栄養失調で痩せ細つていて、鬼若丸ほど逞（たくま）しくはありませんでしたから。